



在宅医療における 薬剤師の役割について

松戸市薬剤師会在宅医療連携委員会

黄 栄吉

顔の見えない薬剤師から 顔の見える薬剤師に変身！？

- 「カンファレンスに初めて参加する前と、今現在で、職種イメージ・役割に対する捉え方が特に変わった、新たに知ったことの多かった職種は？」という質問に

—在宅連携拠点事業のアンケート調査結果より—

- 堂々！？の選択割合66.7%で薬剤師が第1位！！
 - 2位 56.8% 歯科・歯科衛生士
 - 3位 48.8% 医師を抑えて

アンケート記載事項

- 患者全体のことを深く考えている
- 熱意がある
- 他職種との連携に協力的
- 24時間365日に向けて努力している
- 薬の一元化ができるよう考えている
- 社会背景も治療や今後の療養に大切だと思っている
- 医師の気づかない薬剤への考え方がある
- 訪問診療を利用していなくても利用できる等

在宅医療における服薬の問題点

- 高齢者の複数以上疾患合併による多数薬剤の使用や独居老人、老々介護の増加等
- 重複投与、相互作用のリスク
- 加齢による腎機能・肝機能等の代謝機能低下により副作用のリスクが高まる
- 認知機能低下や視力低下、嚥下機能低下による服薬管理、飲み残し・飲み忘れ等のコンプライアンス低下が起こりやすい
- 長年の服薬による、誤った薬識、自己調節等

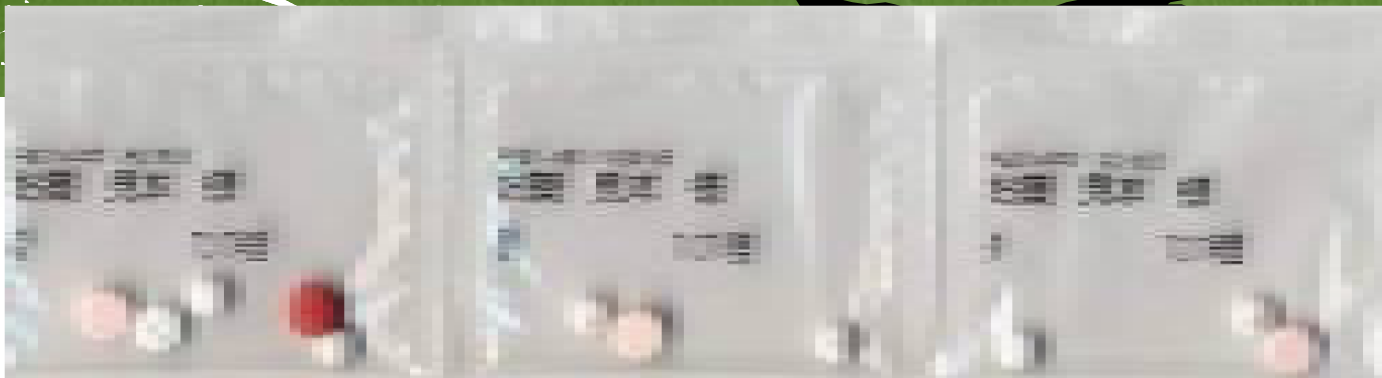
薬剤師の訪問薬剤管理指導業務

- 薬の配達
- 処方内容の確認
- 用法・用量・重複投与・相互作用等の確認
- 服薬状況の確認
- 服薬管理は誰なのか
- 残薬確認
- 本人・介護者の服薬アセスメント
- 服薬アドヒアランス向上の為の指導と工夫
- 体調(食事・排泄・睡眠・嚥下機能等)の確認
- 処方薬の効果と副作用のモニタリング等
- 無菌調剤室の活用による、注射薬の供給
- 緊急調剤への対応等

服薬状況が悪い場合、その理由を探り、改善のための対策を行う。（服薬支援）

飲まない（飲めない）	理由対応策
①薬の整理がつかなくなったため、飲めない	残薬や併用薬を、重複や相互作用、併用禁忌等に留意し整理する
②何の薬か理解していないため、飲まない	薬効を理解できるまで繰り返し説明し、その理解を助けるための服薬支援をする。
③薬の副作用が怖いため、飲まない	副作用について、恐怖心を取りつつ対応策を話し合い、納得して服薬できるようにする
④錠剤、カプセル、または散剤が飲めない	患者ごとの適切な服用形態の選択と医師への提案。嚥下ゼリー、オブラート、簡易懸濁法などの導入提案

個々の患者の能力に応じた薬の管理方法 例

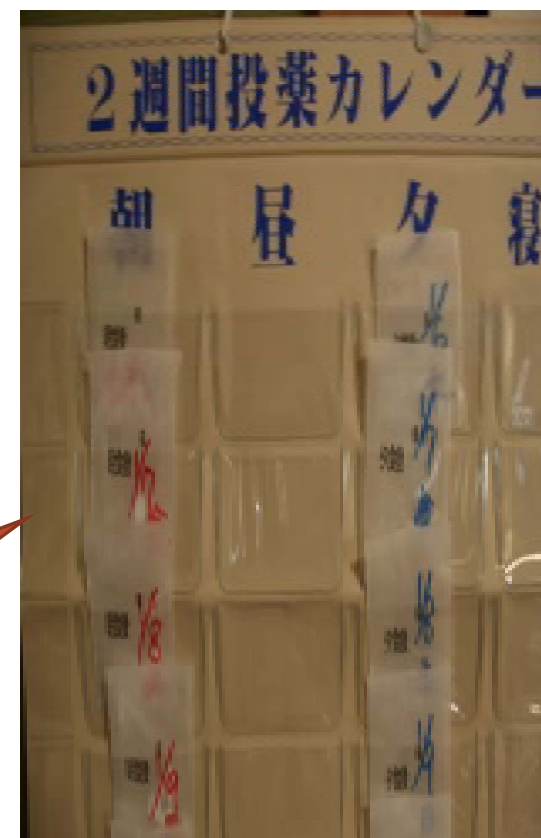


一包化



ティッシュ箱に仕切りを入れて手製のピルケース作成

投薬
カレンダー



残薬の確認と整理の実例

(長野県薬剤師会 事例)



患者Aさん（女性）

複数科を受診。多剤服用。訪問介護員は入っているが、薬は自己管理にて整理がつかない状態。

A病院（心療内科） 処方薬 7種類

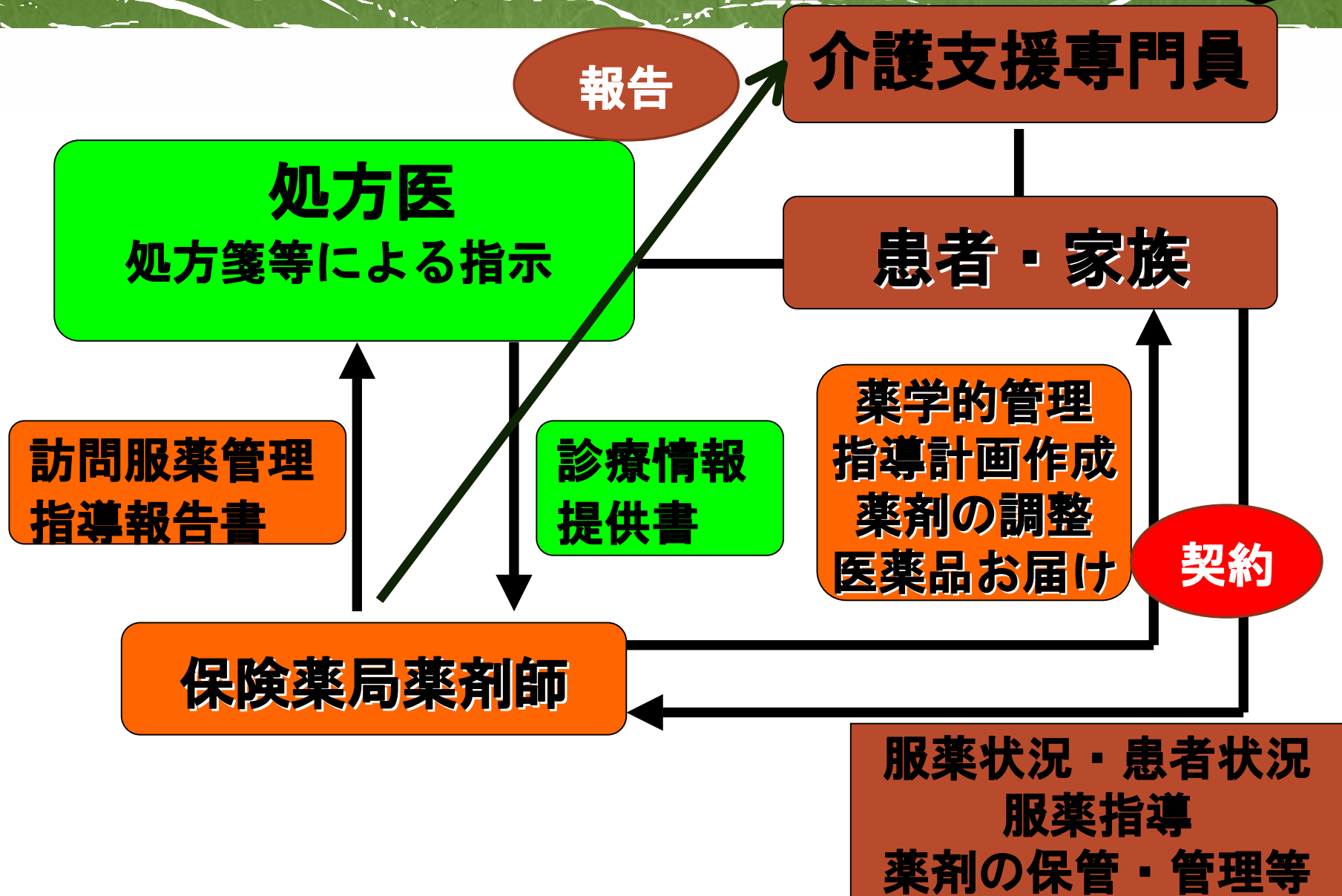
B診療所（内科） 処方薬 4種類

在宅訪問時に驚くほどの飲み残しが出てくることは多い。残薬整理は訪問初期段階の最重要課題。



【対応】 処方医に疑義照会を行い、A、B両方の病院の処方薬を合わせて一包化し整理。これにより服用状況も改善。

薬剤師による 居宅療養管理指導業務の流れ



在宅患者訪問薬剤管理指導と居宅療養管理指導

点数 単 位 数	在宅患者訪問薬剤 管理指導料(医療保険)	居宅療養管理指導費 及び介護予防(介護保険)
	同一建物居住者以外 1回 500点/回 同一建物居住者 1回 350点/回 麻薬管理指導加算100点/回	平成24年度4月改訂で 左記と同一 但し単位
算定 上限	月4回迄 ※癌末期患者、中心静脈 栄養の対象患者の場合、 週2回かつ月8回迄	左記と同一
算定 間隔	週6日以上	左記と同一

今後の訪問薬剤管理指導業務

➤ 在宅医療連携拠点事業に参集した松戸市保険薬局グループの成果

- ・ 在宅医療はじめての一步
- ・ 処方箋をスムーズに受ける
- ・ 365日24時間調剤対応の地域全体で支える体制
造り実現等
- ・ 多職種連携の一層の推進—退院時共同指導、在宅患者緊急時等共同指導、ケアカンファレンス、お薬手帳の活用等

松戸市薬剤師会内に
在宅医療連携委員会発足

情報共有

高い効果を期待できる薬物療法方針等決定プロセスに貢献